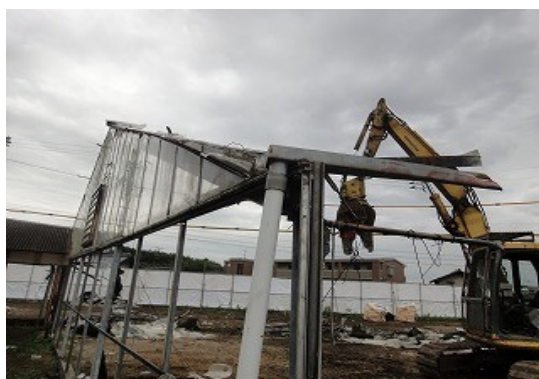


会社員に定年があるように、温室にも引退のときがあるのです。父が33年前に建てた鉄骨ハウスが耐用年数を越え、老朽化していました。そして、父が3年前に病に倒れてからは、私が修理と管理をしていたのです。いつか壊さなくちゃいけない、と思っていましたよ。しかし、220坪という広さと、頑丈さゆえ、経費がかかり、なかなか解体に踏み切れなかったのです。しかし、市の道路拡張工事にハウスがかかり、この機会に、思い切って解体することになったわけです。

工事は8月の盆明けに、暑さの厳しい中で行われました。重機を使用した解体作業は、私が想像したより、はるかに早く、すこぶる荒っぽいやり方でした。まるで恐竜の頭のような重機が、太い鉄骨に噛みつき、引きちぎり、放り投げてゆく一すさまじい勢いで、ハウスは鉄くずの山と化していったのです。わずか3日間で老朽ハウスは姿を消し、それから基礎部分の取り壊しをして、5日間で全くのさら地になってしまいましたよ。



かつて、父が元気一杯に動き回り、温室一杯にランの花が咲き乱れて、父と母が出荷準備に追われていた・・・そんな光景を思い出し、わたしは索漠とした気持ちになりましたよ。なにか無性に寂しいのですよ。いつかは私の手でやらなくてはいけない仕事であったのですが、それを終えてみると、安堵よりも「むなしさ」が先立つのですね。

長年見慣れた建物や風景が失われるのは、つらいことです。なにもなくなったハウス跡地には、今はひとまわり小さなビニールハウスが建っています。そして、その中にはイチゴの苗がいっぱいに植えてあるのですよ。こいつらの面倒が、わたしのこれからの仕事なのです。



なんぼ、古いものを壊すのは寂しい言うても、新しいものをつくるためにやあ、しょうがないことよのう。